コリント人への手紙第一　11 回
教会内の無秩序
―性的汚れ―
6：12～20

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
      ①近親相姦の罪（5：1～13）
      ②信者同士の裁判（6；1～11）
      ③性的汚れ（6：12～20）

2. 注目すべき点
   (1) ギリシア人は、肉体を軽視した。
      ①魂は肉体という墓に閉じ込められている。
   (2) コリントの信者の中には、遊女と交わる者たちがいた。
      ①食欲は容認されるのに、なぜ別の肉体的欲求である性欲は否定されるのか。
      ②信者の魂は、より高い位置に引き上げられた。
      ③それゆえ、肉体において行ったことが魂に影響を与えることはない。
      ④これは、キリスト者の自由の濫用である。
   (3) パウロは、聖書的な肉体の理解について教える。

3. アウトライン（性的汚れ）
   (1) 誤った前提の論破（12～14 節）
   (2) 遊女との交わりに対する反論（15～17 節）
   (3) 遊女との交わりが罪である理由（18～20 節）

4. 結論
   (1) 教会内の無秩序
   (2) 3 つの問題

性的汚れに対する対処法について学ぶ。

Ⅰ．誤った前提の論破（12～14 節）

1. 12節

1Co 6:12 「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。

(1) パウロは、対話形式でコリントの信者たちの誤解を糾弾する。

①彼らは、旧約聖書の律法から解放されたという自由を誤解していた。

②特に、性的関係において、自由の誤解があった。

③対話形式は、ギリシア人に馴染み深い方法である。

④これ以降、この手紙では対話形式が多用される。

(2) パウロは、「キリスト者の自由」を主張した使徒である。

①ガラテヤ書のテーマは、「キリスト者の自由」である。

②パウロの教えは、放縦な生活を許すものとしてよく誤解された。

③今も、恵みを強調すると、同様の批判を受けることがある。

④「一度救われると、救いを失うことはない」という教えは、批判の対象となる。

(3)「**すべてのことが私には許されている**」

①これは真理であり、コリントの信者たちのスローガンである。

②パウロは、そのスローガンに補足説明を付け加える。

(4) 2つの補足説明

①「**すべてが益になるわけではありません**」

＊信者は、他者の益になるかどうかで行動を判断する。

②「**私はどんなことにも支配されはしません**」

＊信者は、主に対する忠誠を第一とする。

2. 13～14節

1Co 6:13 「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらも滅ぼされます。からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです。

1Co 6:14 神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

(1)「**食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある**」

①これも真理であり、コリントの信者たちのスローガンである。

②食物と消化器官の関係は、自然界に存在する「適合」という原理である。

③彼らは、からだと性的行為の関係も「適合」という原理であると主張する。

(2) そのスローガンに補足説明が付加される。

①神は、食物も腹も滅ぼされる。つまり、永遠の価値はないということである。

②しかし、主が贖われたからだには、永遠の価値がある。

③「**からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです**」

＊からだと淫らな行いは、適合していない。

＊からだに適合しているのは、主の栄光である。

(3)「**神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます**」

①神は、主イエスをよみがえらせた。

②その御力によって、信者もよみがえらせてくださる。

＊携挙のときには、生きたまま栄化される者もいる。

③つまり、神はからだについて永遠の計画を持っておられるということである。

(4) 以上の神学的理解をもって、パウロは遊女との交わりがなぜ罪なのかを論じる。

①コリントの信者たちは、遊女との交わりの本質を理解していない。

②彼らは、信者の回心の本質を理解していない。

Ⅱ．遊女との交わりに対する反論（15～17 節）

1. 15 節

1Co 6:15 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。

(1) 信者のからだは、キリストのからだの一部である。

①キリストのからだとは教会である。

(2) 遊女と交わることは、重大な罪である。

①信者と遊女の交わりは、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とすることである。

②つまり、キリストのからだと遊女のからだをつなげることである。

③そんなことがあってはならない。

2. 16 節

1Co 6:16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。

(1) 性欲を満たすことと、食欲を満たすことは、次元が違う。

①遊女と交わる者は、その行為の間だけ一つのからだになるわけではない。

②その交わりには、永続性がある。

(2) 創 2：24

Gen 2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

①男女は、性的交わりによって、一体となる。

②肉体の一体化だけでなく、霊的一体化が含まれている。

3. 17 節

1Co 6:17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

(1) キリストを信じた人は、霊的にキリストと一つになる。

①信者とキリストを切り離すことができない。

②信者が遊女と交わることは、キリストを遊女につなげることである。

Ⅲ. 遊女との交わりが罪である理由（18～20 節）

1. 18 節

1Co 6:18 淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

(1) 不道徳な状況が襲ってきたなら、すぐに逃げる（避ける）ことである。

①創 39：12

Gen 39:12 彼女はヨセフの上着をつかんで、「一緒に寝ましょう」と言った。しかしヨセフはその上着を彼女の手に残し、彼女から逃れて外へ出た。

（例話）ビリー・グラハムの証し

(2) 淫行の罪は特殊な罪である。

①これは、自分のからだに対して犯す罪である。

②淫行の結果は、からだに残る（病気も含めて）。

③淫行は、キリストのからだを汚す罪である。

2. 19～20 節

1Co 6:19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおら

れる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。
1Co 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

(1) 教会は、聖霊の宮である（3：16）。

①ここでは、信者個人が聖霊の宮だと言われている。

②ロマ 8：9

Rom 8:9 しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

(2) 信者のからだは、もはや彼ら自身のものではない。

①信者は、代価を払って買い取られた。

②信者には、代価を払って買い取ってくださった方への責務がある。

③自分のからだをもって神の栄光を現すことが、信者の責務である。

結論

1. 教会内の無秩序

(1) 原因は、懲戒が実行されていないことにあった。

(2) 解決法は、分派の問題（1：10～4：21）の場合と同じである。

①パウロは、読者をキリストの十字架に連れ戻す。

(3) 1：23～25

1Co 1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、
1Co 1:24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。
1Co 1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

(4) 6：20

1Co 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

2. 3 つの問題

(1) 近親相姦の罪（5：1～13）

①思い上がりの罪

②肉的信仰から出た罪

③パン種をただちに取り除く。

(2) 信者同士の裁判（6；1～11）

①罪を軽く見る傾向

②「正しくない者」は神の国を相続できない（神の国に入ることができない）。

③放縦な生活を続ける者は、本当に救われているかどうか吟味すべきである。

(3) 性的汚れ（6：12～20）

①遊女との交わりは、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とすることである。

②キリストのからだと遊女のからだをつなげるようなことがあってはならない。

③信者は、代価を払って買い取られた。

④信者には、神の栄光を現す責務がある。

コリント人への手紙第一　12 回
結婚に関する教え（1）
―既婚者への助言―
7：1～16

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
         ＊既婚者への助言（1～16 節）
         ＊結婚に関する基本原則（17～24 節）
         ＊未婚の者たちへの助言（25～40 節）

2. 注目すべき点
   (1) パウロは、「前の手紙」で、いくつかの指示を出した。
   (2) コリントの信者たちは、それに関する質問を書いてきた。
      ①根底には、パウロの教えに対する反発心がある。
   (3) パウロは、「〇〇について」（ペリ・デ）という用語を用いて、各質問に答える。
   (4) 7～16 章は、各質問に対する回答である。

3. アウトライン（既婚者への助言）
   (1) 結婚における肉体関係の重要性（1～7 節）
   (2) 独身でいることの利点（8～9 節）
   (3) 離婚の禁止（10～16 節）

4. 結論：8 項目の要約

既婚者への助言について学ぶ。

Ⅰ．結婚における肉体関係の重要性（1～7 節）

1. 1 節

1Co 7:1　さて、「男が女に触れないのは良いことだ」と、あなたがたが書いてきたことについてですが、

(1) パウロは 2 つの極端な教えと戦っていた。

①6 章では、キリスト者の自由の濫用（道徳的罪）と戦った。

②7 章では、禁欲主義と戦う。

＊既婚の信者は、未婚の者のように生活すべきである。

＊未婚の信者は、そのままの状態にとどまるべきである。

(2) 訳文の比較

「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのは良いことです」（新改訳３）

「さて、『男が女に触れないのは良いことだ』と、あなたがたが書いてきたことについてですが、」（新改訳 2017）

①「**男が女に触れないのは良いことだ**」は、コリントの信者たちのスローガン。

②この部分は、送られてきた教会の手紙からの引用であろう。

(3) コリントの信者たちは、ギリシア哲学の霊肉二元論の影響を受けていた。

①霊は善で、肉体は悪である。

②それゆえ、結婚していても、信者は肉体関係を控えるべきである。

＊「男が女に触れる」とは、性的関係の婉曲語である。

③さらに、未婚の者はそのままの状態にとどまるべきである。

2. 2 節

1Co 7:2 淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。

(1) パウロは、ヘブル的な結婚観を教える。

①ギリシア哲学とは異なり、ヘブライズムは物質を評価する。

②結婚は、神が定めた制度である。

③結婚関係において、男女が性的関係を持つことは、自然なことである。

(2)「自分の妻を持つ」と「自分の夫を持つ」は、性的関係の婉曲語である。

①夫婦の性的関係の目的は、「**淫らな行いを避けるため**」である。

＊それ以外の目的もあるが、コリントの町では、この目的が重要であった。

3. 3〜5 節 a

1Co 7:3 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。

1Co 7:4 妻は自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは夫のものです。同じように、夫も自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは妻のものです。

1Co 7:5a 互いに相手を拒んではいけません。

（1）夫婦には、互いの必要を満たし合うという責務が与えられている。

①創 2 ：18

Gen 2:18 また、神である【主】は言われた。「人がひとりでいるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

②相手の性的必要を満たすことも、責務に含まれている。

（2）パウロは、夫と妻に同等の権利を認めている。

①妻のからだについての権利は、夫のものである。

②夫のからだについての権利は、妻のものである。

③互いに相手を拒んではいけない。

4. 5b～6 節

1Co 7:5b　ただし、祈りに専心するために合意の上でしばらく離れていて、再び一緒になるというのならかまいません。これは、あなたがたの自制力の無さに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑しないようにするためです。

1Co 7:6 以上は譲歩として言っているのであって、命令ではありません。

（1）例外的に、肉体関係を控えることは許される。

①祈りに専心するという目的のために

②合意の上で

③祈りの期間を決めて

（2）信者には、より重要な霊的務めを優先させる場合がある。

①食事を断って、断食をする。

②睡眠を断って、徹夜で祈る。

③夫婦の交わりを断って、祈りに専念する。

（3）夫婦の肉体関係が重視される理由は、サタンの誘惑を避けるためである。

①不自然な禁欲主義は、サタンの誘惑を招く。

②結婚という制度は、神から与えられた祝福である。

③結婚関係の原則は、自然な肉体関係を維持することである。

④肉体関係を控えてもよいというのは、パウロにとっては譲歩である。

5. 7 節

1Co 7:7 私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです。しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。

(1) パウロは、独身であった。

①独身生活には、主のしもべとしての利点がある。

②妻がいれば、困難な生涯を強いることになる。

③また、妻のために時間を使うことになる。

(2) パウロは、すべての人が独身であることを願っている。

①しかし、その願いは非現実的であることを知っている。

②なぜなら、独身は神から与えられた賜物の一つだからである。

③それぞれが、自分に与えられた賜物に従って生き方を選べばよい。

Ⅱ．独身でいることの利点（8～9 節）

1. 8 節

1Co 7:8 結婚していない人とやもめに言います。私のようにしていられるなら、それが良いのです。

(1) 助言の対象が、信者の既婚者から未婚の者とやもめに移行する。

①パウロのように独身でいられるなら、それが良い。

②既婚者は、未婚者を見下したり、憐れんだりしてはならない。

③また、結婚するように強制してはならない。

④独身生活には、結婚生活とは異なった恵みと喜びがある。

2. 9 節

1Co 7:9 しかし、自制することができないなら、結婚しなさい。欲情に燃えるより、結婚するほうがよいからです。

(1) 自制することができないというのは、独身の賜物がないということである。

①その場合は、情欲に燃えて罪を犯すよりは、結婚するほうがよい。

②伴侶を求める祈りをするなら、神の恵みが働くと信じたい。

Ⅲ．離婚の禁止（10～16 節）

1. 10～11 節

1Co 7:10 すでに結婚した人たちに命じます。命じるのは私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。

1Co 7:11 もし別れたのなら、再婚せずにいるか、夫と和解するか、どちらかにしなさい。ま

た、夫は妻と離婚してはいけません。

(1) 助言の対象が、結婚した信者たちに移行する。

①コリントの信者の中には、禁欲を理由に離婚を願う者たちがいたのであろう。

＊現代人は、別の人と結婚するために離婚を願う。

②ここでパウロは、主イエスの教えを引用する。

③「**妻は夫と別れてはいけません**」

④結婚関係の問題が生じた場合は、問題解決に向けて努力をすべきである。

(2) 現実問題として、妻が離婚せざるを得ない極端なケースもある。

①ギリシア・ローマ文化では、妻が夫を離縁することができた。

②もし別れたのなら、2 つの選択肢がある。

＊再婚せずにいる。

＊夫と和解する。

(3) 夫に対しては、「**妻と離婚してはいけません**」と命じられる。

①この場合は、例外規定はない。

②ユダヤ文化では、夫だけが離縁の権利を有していた。

2. 12～13 節

1Co 7:12 そのほかの人々に言います。これを言うのは主ではなく私です。信者である夫に信者でない妻がいて、その妻が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

1Co 7:13 また、女の人に信者でない夫がいて、その夫が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

(1)「そのほかの人々」とは、不信者と結婚している信者である。

①このテーマに関するイエスの教えはない（少なくともパウロは知らなかった）。

②そこでパウロは、「**これを言うのは主ではなく私です**」と書いた。

(2)「不信者と結婚した信者は、結婚生活を続けるべきか、離婚すべきか」

①不信者の伴侶が一緒にいることを承知している場合は、それでよい。

②夫が信者の場合も、妻が信者の場合も、結論は同じである。

3. 14 節

1Co 7:14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、また、信者でない妻も信者である夫によって聖なるものとされているからです。そうでなかったら、あなたが

たの子どもは汚れていることになりますが、実際には聖なるものです。

(1) 夫婦の片方が信者である場合、もう片方は、「**聖なるものとされている**」。

②救われているという意味ではない。

③特別の祝福のために選び分けられているという意味である。

④不信者は、信者の伴侶から良い霊的影響を受けることができる。

⑤救いに至る信仰を持つ可能性が高い。

(2)「**そうでなかったら、子どもは汚れていることになりますが、実際には聖なるものです**」

①子どもは、「**聖なるものです**」。

②子どもは、良い霊的影響を受けることができる。

③救いに至る信仰を持つ可能性が高い。

4. 15～16 節

1Co 7:15 しかし、信者でないほうの者が離れて行くなら、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとして、あなたがたを召されたのです。

1Co 7:16 妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうして分かりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうして分かりますか。

(1) 不信者のほうが離れて行くなら、信者はそれを認めてもよい。

①神は、家庭内に争いがあることを願っておられない。

②離婚によって平和が得られるなら、それが良い。

(2) 結婚生活を続けても、相手が救われるかどうかは、分からない。

①それゆえ、牢獄のような結婚生活から逃れることは許される。

結論：8 項目の要約

(1) 夫と妻の関係は、キリストと教会の関係の型である。

(2) 結婚関係において、夫と妻は霊肉ともに一体化するように召されている。

(3) 離婚が許されるのは、不信者の側が去って行く場合だけである。

(4) 不信者が結婚生活の継続を願っているなら、離婚してはならない。

(5) 片方が信者である家庭には、主の特別な守りがある。

(6) 独身は、主からの賜物である。

(7) 独身の賜物がないなら、結婚すべきである。

(8) 信者が不信者の伴侶から被害を受けている場合は、別居を考えるべきである。

コリント人への手紙第一　13 回
結婚に関する教え（2）
―結婚に関する基本原則―
7：17～24

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
         ＊既婚者への助言（1～16 節）
         ＊結婚に関する基本原則（17～24 節）
         ＊未婚の者たちへの助言（25～40 節）

2. 注目すべき点
   (1) パウロは、「前の手紙」で、いくつかの指示を出した。
   (2) コリントの信者たちは、それに関する質問を書いてきた。
      ①根底には、パウロの教えに対する反発心がある。
   (3) パウロは、「〇〇について」（ペリ・デ）という用語を用いて、各質問に答える。
   (4) 7～16 章は、各質問に対する回答である。
   (5) その最初が、結婚に関する教えである。

3. アウトライン（結婚に関する基本原則）
   (1) 信者への警告（17 節）
   (2) 割礼があるか無割礼か（18～20 節）
   (3) 奴隷か自由人か（21～23 節）
   (4) まとめ（24 節）

4. 結論：聖書は奴隷制を容認しているのか。

結婚に関する基本原則について学ぶ。

Ⅰ．信者への警告（17 節）

1. 17 節

1Co 7:17 ただ、それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態で歩むべきです。私はすべての教会に、そのように命じています。

(1)「ただ」（エイ・メイ）は、警告を発するためのことばである。

①1 コリ 7：15

1Co 7:15 しかし、信者でないほうの者が離れて行くなら、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとして、あなたがたを召されたのです。

②離婚することが望ましいと考える者たちがいた。

③コリントの信者たちは、霊的であるという意味を誤解していた。

(2)「**それぞれ神から召されたときのままの状態で歩むべきです**」

①これは、神の摂理的導きを受け入れるべきであるという勧告である。

②信者になったときの状態を無理に変えるべきではない。

③既婚であっても、独身であっても、そのままの生活を続ければよい。

④信者同士の結婚であっても、不信者との結婚であっても、そのままでよい。

(3)「**私はすべての教会に、そのように命じています**」

①この表現は、この書簡で 4 回も出てくる。

＊4：17、7：17、11：16、14：33

＊この教えは、普遍的な教えである。

②現状維持の具体例が、2 つ挙げられる。

＊割礼か無割礼か

＊奴隷か自由人か

II．割礼があるか無割礼か（18～20 節）

1．18 節

1Co 7:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくそうとしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。

(1) 割礼がある信者（ユダヤ人）に対して

①信じたときに割礼を受けていたのなら、その跡をなくそうとしてはならない。

②ユダヤ人は、異邦人のようになる必要はない。

③ユダヤ人は、ユダヤ人として信仰生活を始めればよい。

④当時、割礼の痕跡を消すユダヤ人たちがいた。

＊この時代、ユダヤ人はヘレニズム文化の影響を受けていた。

＊ヘレニズム文化では、裸体の美が重んじられた。

＊ジムナジウムでの運動や競技は、裸体での参加が一般的であった。
＊ヘレニズム文化圏では、割礼された身体は異質であると見なされた。
＊ユダヤ人の中には、同化のために割礼の跡を隠す手術を受ける者がいた。

(2) 無割礼の信者（異邦人）に対して
①異邦人として信じたのなら、異邦人として信仰生活を始めればよい。
②異邦人は、ユダヤ人のようになる必要はない。

2. 19～20 節

1Co 7:19 割礼は取るに足りないこと、無割礼も取るに足りないことです。重要なのは神の命令を守ることです。

1Co 7:20 それぞれ自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。

(1) 神は、外見ではなく、内面をご覧になる。
①割礼も無割礼も、取るに足りないことである。
②重要なのは、神の命令を守ることである。

(2) 信者は、神から与えられた摂理的状況の中で生きるように召されている。
①罪に関係した状況でない限り、急激な変化を求めるべきではない。
②信者は、状況を超越した状態に引き上げられたのである。

(3) その状況が罪に関係したものである場合は、変化を求めるべきである。
①倫理的に問題のある職業に就いているなら、転職すべきである。
（ILL）めかけが信者になった場合、どうするか。

Ⅲ. 奴隷か自由人か（21～23 節）

1. 21 節

1Co 7:21 あなたが奴隷の状態で召されたのなら、そのことを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう。

(1) 奴隷が救われた場合、どうすべきか。
①奴隷であることを気にする必要はない。
②主人に反抗し、自由を要求すべきではない。
③奴隷であっても、祝された信仰生活を送ることができる。

(2)「**もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう**」
①新改訳 2017 の解釈

＊「自由になる機会があるなら、自由の身になればよい」

＊自由人のほうが、より良く神に仕えることができる。

②共同訳の解釈

＊「自由の身になれるとしても、そのままでいなさい」

＊奴隷状態のままでも、キリストを証しすることは可能である。

2. 22 節

1Co 7:22 主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。

(1) 現状変更を求める必要がない理由

①奴隷で救われた者は、キリストに属する自由人となった。

＊彼は、罪と悪魔の束縛から解放された。

②自由人として救われた者は、キリストに属する奴隷となった。

＊彼は、自由意志でキリストに仕えるしもべとなった。

(2) 優先順位を確立することが重要である。

①奴隷は、自由人となったことに目をとめるべきである。

②自由人は、奴隷とされたことに目をとめるべきである。

③私たちには、可能性にではなく、限界に目をとめるという傾向がある。

3. 23 節

1Co 7:23 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となってはいけません。

(1) 信者は、代価を払って買い取られた。

①代価とは、キリストの血潮である。

＊奴隷は高価である。

(2) 1 コリ 6：20（遊女との交わり）

1Co 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

①信者は、神の所有物となった。

②霊的な意味で、人間の奴隷となってはならない。

③信者は、キリストの導きと教えに従うべきである。

Ⅳ. まとめ（24 節）

1. 24 節

1Co 7:24 兄弟たち、それぞれ召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。

(1) これが、この箇所のまとめである。

①割礼や奴隷の例が出てきたが、文脈上、結婚と独身がテーマであった。

②既婚者であっても独身であっても、そのままの状態で神に仕えることができる。

③より効果的に神に仕える道が開かれるなら、その機会を利用すればよい。

結論：聖書は奴隷制を容認しているのか。

1. 当時の奴隷は、アメリカ史における奴隷とは異なる。

(1) コリントの人口の約 3 分の 1 は奴隷であった。

①奴隷階級は、安定した社会の維持に大いに貢献した。

②彼らは、主人から生活を保障されていた。

③中には、主人と利益を分け合う奴隷もいた。

④自分のいのちの所有者は主人であるという意味で、奴隷は奴隷であった。

(2) ストア学派は、主人と奴隷は倫理的・道徳的に対等になれると教えた。

①マーカス・アウレリウス（紀元 2 世紀の皇帝）は、ストア派であった。

②その彼でも、自らの哲学的確信を現実社会に適用しようとはしなかった。

(3) 奴隷による反乱は、徹底的に鎮圧された。

①スパルタクスによる反乱（前 73～71 年）

②ローマ時代、奴隷による反乱はすべて鎮圧された。

2. パウロは、現実的な対応策を採用した。

(1) それ以外の方法では、キリスト教は初期段階で消滅していたであろう。

①パウロは、自由を求めて戦うように奴隷たちに勧める。

②その勧めに応答して、奴隷たちが反乱を起こす。

③ローマ軍がその反乱を鎮圧する。

④パウロを初めとする指導者たちが逮捕され、教会は消滅する。

⑤キリスト教の広がりは、そこで終わる。

3. キリスト教の本質

(1) キリスト教は、政治運動ではない。

①主イエスもパウロも、急激な社会変革を教えなかった。

(2) キリスト教には、社会を変革する力がある。

①福音は、個人の心を変える。

②福音には、社会を変革するための原則が含まれている。

③創 1：27

Gen 1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

(3) パウロの現実的教え

①エペ 6：5～7

Eph 6:5 奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

Eph 6:6 ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、

Eph 6:7 人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。

②エペ 6：9

Eph 6:9 主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。あなたがたは、彼らの主、またあなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っているのです。

(4) キリスト教が広がった国では、福音的なリーダーによって奴隷制は廃止された。

①イギリス：1833 年の奴隷制度廃止法

②アメリカ：南北戦争後の 1865 年に奴隷制が廃止された。

(5) 奴隷の問題は、現代的課題でもある。

①世界に 2,700 万人以上の奴隷がいると言われている。

②強制労働、性産業、人身売買など

コリント人への手紙第一　14 回
結婚に関する教え（3）
―未婚の者たちへの助言―
7：25～40

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
         ＊既婚者への助言（1～16 節）
         ＊結婚に関する基本原則（17～24 節）
         ＊未婚の者たちへの助言（25～40 節）

2. 注目すべき点
   (1) パウロは、「前の手紙」で、いくつかの指示を出した。
   (2) コリントの信者たちは、それに関する質問を書いてきた。
   (3) パウロは、「〇〇について」（ペリ・デ）という用語を用いて、各質問に答える。
   (4) 7～16 章は、各質問に対する回答である。
   (5) その最初が、結婚に関する教えである。

3. アウトライン（未婚の者たちへの助言）
   (1) 未婚でいることの利点（25～28 節）
   (2) 未婚でいることの理由（29～35 節）
   (3) 結婚の正当性（36～40 節）

4. 結論
   (1) 既婚者への励まし
   (2) 独身者への励まし
   (3) 終末的生き方の勧め

未婚の者たちへの助言について学ぶ。

Ⅰ．未婚でいることの利点（25～28 節）

2024年2月25日（日）　1コリ7：25～40　結婚に関する教え（3）

1. 25節

1Co 7:25 未婚の人たちについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べます。

(1)「〇〇について」（ペリ・デ）

①ここから、未婚の人たちへの助言が始まる。

②内容は、コリント教会の禁欲主義への反論である。

③「未婚の人たち」（パーセノイ）とは、処女のことである。

＊婚約している処女たち、婚約を考えている処女たち

(2)「**私は主の命令をうけていませんが、**」

①パウロは、このテーマに関するイエスの教えを知らない。

②パウロは、主のあわれみにより信頼（信任）を得ている者として書いている。

③彼の意見は霊感を受けたもので、信頼性がある。

2. 26節

1Co 7:26 差し迫っている危機のゆえに、男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います。

(1)「**差し迫っている危機のゆえに**」

①コリント教会に迫っている危機か。

②「終わりの日」の描写か。

③初臨と再臨の間の時代は、危機の時代である。

＊不信者たちの敵対がある。

＊教会の背教が起こる。

(2)「**男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います**」

①「人は現状にとどまっているのがよいと思います」（共同訳）

＊男＝人

②召されたときの状態にとどまるというのが、パウロの教えである。

3. 27～28節

1Co 7:27 あなたが妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません。妻と結ばれていないなら、妻を得ようとしてはいけません。

1Co 7:28 しかし、たとえあなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ未婚の女が結婚しても、罪を犯すわけではありません。ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのような目にあわせたくないのです。

（1）現状維持の原則

①結婚しているなら、離婚しようとすべきではない。

＊不信者の相手が去って行く場合は、それを受け入れてもよい。

②未婚の人は、結婚しようとすべきではない。

＊主への奉仕に集中できる。

③しかし、結婚したとしても、罪を犯すわけではない。

＊独身生活を勧める理由は、独身者の益を考えてのことである。

＊結婚する人たちは、身に苦難を招くことになる。

＊迫害が襲ってきたときには、子どもがいると苦難が増す。

④以上の教えは、「迫害」が迫っていることを前提とした牧会的配慮である。

＊結婚を禁じているわけではない。

Ⅱ．未婚でいることの理由（29～35 節）

1. 29 節 a

1Co 7:29a 兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。

（1）パウロは、信者とこの世の関係に目を転じる。

①「時が縮まっているからです」（共同訳）

②再臨の時は近づいている。

③人生は有限である。

④永遠の視点から、人生を生きることが重要である。

2. 29b～31 節

1Co 7:29 b　今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。

1Co 7:30 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。

1Co 7:31 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。

（1）信者のあるべき姿

①結婚している人は、主第一の生活をすべきである。

②泣いている人は、泣いていないかのようにする。

＊やがて悲しみは取り去られるから。

③喜んでいる人は、喜んでいないかのようようにする。

＊やがて試練がやってくるから。

④買う人は、自分が所有者でないかのようにする。

＊すべては主のものだから。

(2)「**この世の有様は過ぎ去るからです**」

①それゆえ、この世のことに関わり過ぎないようにする。

②既婚者であっても、独身者であっても、この世の影響を受けないようにする。

3. 32 節 a

1Co 7:32a あなたがたが思い煩わないように、と私は願います。

(1) クリスチャンは、終末的生き方をする人たちである。

①結婚や経済活動が、クリスチャンの存在価値を決めるのではない。

②終末的祝福を待ち望む人は、この世の思い煩いから解放される。

5. 32b～34 節

1Co 7:32b　独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。

1Co 7:33 しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、

1Co 7:34 心が分かれるのです。独身の女や未婚の女は、身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。

(1) 献身した 2 種類の信者の比較

①独身者は、主に喜ばれることは何かを考える。

②既婚者は、主への奉仕以外に、家族への配慮という責務がある。

③しかし、独身者のほうが優れているとは言えない。

④独身者であっても、自分のためだけに時間を使う者もいる。

6. 35 節

1Co 7:35 私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。

(1) パウロの助言は、命令ではない。

①結婚生活の本質を教え、各人が自分にふさわしい選びをするように導いている。

②根底にある認識

＊差し迫っている危機のゆえに

＊時は短くなっている。

③結婚するかどうか、子どもは何人欲しいかなどは、各人に委ねられている。

Ⅲ．結婚の正当性（36～40 節）

1. 36 節

1Co 7:36 ある人が、自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしていると思ったら、また、その婚約者が婚期を過ぎようとしていて、結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。罪を犯すわけではありません。二人は結婚しなさい。

（1）婚約者がいる人が、結婚することを躊躇している場合

①その人は、独身生活の方がすぐれていると思い込んでいる可能性がある。

②コリント教会に広がっていた禁欲主義の影響を受けている可能性がある。

（2）その人の問題

①自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしている。

＊婚約者を中途半端な状態に置いている。

②婚約者が婚期を過ぎようとしている。

③その場合は、望んでいるとおりに結婚すべきである。

2. 37～38 節

1Co 7:37 しかし、心のうちに固く決意し、強いられてではなく、自分の思いを制して、婚約者をそのままにしておこうと自分の心で決意するなら、それは立派なふるまいです。

1Co 7:38 ですから、婚約者と結婚する人は良いことをしており、結婚しない人はもっと良いことをしているのです。

（1）結婚するかしないかの選択は、本人の自由意志によって為すべきである。

①婚約者と結婚する人は良いことをしている。

②結婚しない人はもっと良いことをしている。

③これは、罪か罪でないかの選びではない。

④これは、ベターかベストかの選びである。

3. 39 節

1Co 7:39 妻は、夫が生きている間は夫に縛られています。しかし、夫が死んだら、自分が願う人と結婚する自由があります。ただし、主にある結婚に限ります。

（1）結婚関係は、相手の死によって終わる。

①地上での結婚関係は、天にまで持ち込まれることはない。

②相手が死んだら、残された方は再婚することができる。

③その場合は、再婚相手は信者であることが条件となる。

4. 40 節

1Co 7:40 しかし、そのままにしていられるなら、そのほうがもっと幸いです。これは私の意

見ですが、私も神の御霊をいただいていると思います。

(1) 再婚しないほうが、もっと幸いである。

①ただし、貧しい女性が信仰深い男性と再婚するのは、祝福である。

(2) パウロは、謙遜な態度で助言を与えている。

①「**私も神の御霊をいただいていると思います**」

②結婚するかどうかの問題は、「倫理的テーマ」ではない。

結論

1. 既婚者への励まし

(1) 結婚しても、問題は存在する。

①結婚しても、性的誘惑を体験する人がいる。

②結婚しても、人生の諸問題に遭遇する。

③結婚しても、孤独を感じることがある。

④結婚しても、内面が満たされないことがある。

(2) 祝された結婚生活の秘訣とは何か。

①お互いがキリストに献身すること。

②意見の違いがあっても、お互いに自分を相手に献げること。

③置かれている環境（神の摂理）の中で、神の栄光を表す生き方を目指すこと。

2. 独身者への励まし

(1) 独身の賜物があれば、祝された独身生活を送ることができる。

①社会の圧力を感じる必要はない。

②独身生活は、神からの召命である。

(2) 独身生活の利点

①主に仕えるための時間が、より多く確保できる。

②家庭生活の思い煩いから解放され、奉仕に専念できる。

③注意しないと、怠惰な生活に陥る危険性がある。

3. 終末的生き方

(1) 差し迫っている危機

①コリント教会内の問題か。

②ローマ帝国におけるキリスト教の迫害か。

＊初期の迫害は、ローカルで断続的なものであった。

＊3 世紀に入ると、帝国全体でより組織的な形の迫害が起こった。

＊ディオクレティアヌス帝の時代（284～305 年）が最も厳しかった。

＊投獄、拷問、処刑、集会所の破壊、財産の没収

＊313 年のミラノ勅令により、キリスト教は公認された。

③初臨と再臨の間の一般的な状況か。

(2) 21 世紀のクリスチャン生活

①時が迫っているという認識

②この世の価値観との決別

③自分が持っているものはすべて、神のものであるという認識

④自分のからだを通して神の栄光を表すという決意

コリント人への手紙第一　15 回
偶像に献げられた肉（1）
―愛は知識に勝る―
8：1～13

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
         ＊愛は知識に勝る（8：1～13）
         ＊使徒職の弁明（9：1～27）
         ＊偶像礼拝の罪（10：1～22）
         ＊市場で売っている肉（10：23～11：1）

2. アウトライン（知識に勝る愛）
   (1) 知識と愛の対比（1～3 節）
   (2) 知識の内容（4～6 節）
   (3) 弱い兄弟たちへの配慮（7～13 節）

4. 結論
   (1) 愛は、知識よりもすぐれている。
   (2) 愛は、使命と結びついている。

愛は知識に勝ることを学ぶ。

Ⅰ．知識と愛の対比（1～3 節）

1. 1 節

1Co 8:1 次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。

(1)「〇〇についてですが」（ペリ・デ）
①ここから新しいテーマが始まる。
②新しいテーマは、「**偶像に献げた肉**」である。

③これは現代的テーマではないが、そこからの適用は豊かにある。

(2) 当時の人たちは、偶像の神々にいけにえを献げていた。

①いけにえの肉は 3 つに分割された。

＊一部は、火で焼いて偶像に献げた。

＊一部は、祭司の取り分となった。

＊一部は、献げた人が持ち帰って食べた。

②祭司は、余った分を肉屋に売り、それが市場で流通した。

＊偶像に献げた肉は、質の良い肉なので需要があった。

＊肉屋は、それを偶像に献げた肉だとは公言しなかった。

③また、偶像に献げた肉は、偶像の宮での宴会に供された。

＊この文脈では、偶像の宮で食する肉が中心テーマになっている。

＊この肉は、祭りのときに庶民に供された。

＊貧しい庶民にとっては、肉が食べられる唯一の機会であった。

(3)「**私たちはみな知識を持っている**」

①これは、コリントの信者たちのスローガンであろう。

②パウロとコリントの信者たちは、共通認識を持っていた。

＊クリスチャンであれば、唯一の神以外に神はいないことを知っている。

＊それゆえ、偶像に献げた肉を食べても問題ではない。

＊偶像の宮での食事に参加しても問題ではない。

(4)「**しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます**」

①高ぶりは、コリント教会の主要な問題の一つであった。

②愛が伴わないなら、知識は正しい行動につながらない。

2. 2 節

1Co 8:2 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。

(1) どのテーマに関しても、その内容を知り尽くすことは不可能である。

①必ず、気づいていない新しい視点や情報が残されている。

②自分は何かを知り尽くしたと思うのは、傲慢の極みである。

(2) パウロは、コリントの信者たちを謙遜にさせるために、強いことばを発した。

「その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです」（新改訳 2017）

「その人は、知らねばならないように知ってはいないのです」（共同訳）
「それは、自らの無知をさらけ出しているにすぎません」（リビングバイブル）

3. 3 節

1Co 8:3 しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。

(1) すべてを知ることは不可能であるが、神に知られることは可能である。
①神を愛さなければ、神との親密な関係は生まれない。
②神は、神を愛している者のことを知っておられる。
③「知られています」とは、神に受け入れられているということである。
④知識に基づいてではなく、愛に基づいて行動する人は、神に喜ばれている。

Ⅱ．知識の内容（4～6 節）

1. 4 節

1Co 8:4 さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。

(1) ここで、知識と愛の対比に戻る。
①パウロは、愛が知識に勝ることを証明する。

(2)「**私たちは知っています**」（共通認識）
①世の偶像の神は実際には存在しない。
②唯一の神以外には神は存在しない。

2. 5～6 節

1Co 8:5 というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても、
1Co 8:6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。

(1) 正しい神概念を持たない人たちの知識の内容
①多くの神々や多くの主がある。
②神々と呼ばれるものが天にも地にもある。
③コリントの信者の中にも、正しい神概念を持たない人がいた。

(2) 正しい神概念を持つ人たちの知識の内容
①父なる唯一の神がおられるだけである。

＊この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至る。

②唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけである。

＊この主によってすべてのものは存在する。

＊この主によって私たちも存在する。

③聖書の神は、三位一体の神である。

＊三位一体の教理は、ユダヤ教の信仰告白からは離れている。

＊パウロは、ここではこの議論をそれ以上発展させることはしない。

＊知識の内容を確認するにとどめている。

Ⅲ．弱い兄弟たちへの配慮（7～13 節）

1．7 節

1Co 8:7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。

（1）偶像礼拝から救われた新しい信者の状態

①その人は、真の神と偶像の違いをまだ理解していない。

②その人は、偶像の神々の存在を否定しきれていない。

③その人が偶像に献げられた肉を食べると、どうなるか。

＊その肉を食べると、弱い良心が汚されてしまう。

＊「弱い」とは、キリスト者の自由を十分に体験していないということ。

＊その人は、罪責感を抱えてしまう。

④ロマ 14：23

Rom 14:23 しかし、疑いを抱く人が食べるなら、罪ありとされます。なぜなら、それは信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。

2．8～9 節

1Co 8:8 しかし、私たちを神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。

1Co 8:9 ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい。

（1）強い人（正しい神概念を持った人）への勧告

①何を食べるかによって、神に喜ばれるかどうかが決まるわけではない。

＊食べなくても損にならないし、食べても得にならない。

②自由の行使が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつける。

③弱い人の知識は、不十分である。

＊偶像に献げられた肉を食べるのは、偶像礼拝だと考えている。
＊他の信者が偶像に献げられた肉を食べているのを見て、つまずく。

3. 10〜11 節

1Co 8:10 知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようにならないでしょうか。

1Co 8:11 つまり、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。

(1) パウロは、例話を紹介する。

①知識のあるあなたは、偶像の宮で食事が無害であることを知っている。
②それで、キリスト者の自由を行使して、偶像の宮での食事に参加する。
＊コリントの信者の中には、そのようにしている人がいた。
③良心の弱い人は、あなたの姿を見て、偶像の宮での食事に参加するようになる。
④その人は、それが罪であると感じながら、偶像の神に献げた肉を食べる。
⑤その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになる。
＊それをきっかけに、偶像礼拝に逆戻りするということである。
⑥その弱い人のいのちも、尊いものである。
＊キリストは、その人のためにも死んでくださった。

4. 12 節

1Co 8:12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。

(1) 知識のある信者の使命は何か。

①神と他の信者の関係を破壊するのは、罪である。
②信者は、神と隣人を愛するように召されている。
③知識だけに基づいて行動する人は、隣人とキリストに対して罪を犯している。

5. 13 節

1Co 8:13 ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。

(1) この箇所の結論

①兄弟をつまずかせるなら、偶像に献げた肉は食べない。
②信仰の弱い兄弟をつまずかせないために、キリスト者の自由を制限する。
③9 章と 10 章でも、同じテーマが続く。

結論

1. 愛は、知識よりも優れている。
   (1) 今は、自己主張の時代である。
   (2) クリスチャンは、愛のゆえに自分に与えられている自由を制限する。
   (3) キリスト者の自由を教える例話 2 題
      (ILL) 米国では、交差点での右折が認められている。安全を確認してから。
      (ILL) JOY－イエス、他の人たち、自分。

2. 愛は、使命と結びついている。
   (1) クリスチャンは、神と隣人を愛するために召されている。
   (2) 弱い人を導くことも、愛の実践に含まれる。
   (3) 弱い人がキリスト者の自由を体験できるように、導く。

コリント人への手紙第一　16 回
偶像に献げられた肉（2）
―使徒職の弁明―
9：1～27

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
         ＊愛は知識に勝る（8：1～13）
         ＊使徒職の弁明（9：1～27）
         ＊偶像礼拝の罪（10：1～22）
         ＊市場で売っている肉（10：23～11：1）

2. 注目すべき点
   (1)「〇〇についてですが」（ペリ・デ）ということばが出てこない。
      ①この箇所では、「偶像に献げられた肉」というテーマが続いている。
   (2) 1 コリ 8：13 の確認

1Co 8:13 ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。

      ①コリントの信者たちは、パウロが自由を制限している理由を誤解した。

3. アウトライン（使徒職の弁明）
   (1) 使徒としての権利（1～14 節）
   (2) 権利の制限（15～18 節）
   (3) 使徒としての自由（19～23 節）
   (4) 奨励（24～27 節）

4. 結論：5 つの冠

使徒職の弁明について学ぶ。

2024年3月10日（日）　1コリ9：1〜27　偶像の献げられた肉（2）

Ⅰ．使徒としての権利（1〜14節）

1. 1〜2節

1Co 9:1 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。

1Co 9:2 たとえ私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、私が主にあって使徒であることの証印です。

(1) 4つの修辞的疑問文を投げかけている。

①私には自由がないのですか。→イエス。

②私は使徒ではないのですか。→イエス。

③私は私たちの主イエスを見なかったのですか。→イエス。

④あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。→イエス。

(2) パウロの使徒職を証明するもの

①彼は、ダマスコ途上で復活のイエスに出会った。

②コリント教会は、彼の働きによって設立された。

2. 3節

1Co 9:3 私をさばく人たちに対して、私は次のように弁明します。

(1) パウロは、彼を疑う人たち（コリントの信者たち）に対して弁明する。

①当時の哲学者たちは、授業料、献金、物乞い、労働などで糧を得ていた。

②パウロには、経済的援助を受ける権利があったが、自給伝道を実践した。

③コリントの信者たちは、パウロの使徒職を疑った。

④そこでパウロは、自分には援助を受ける権利があるというところから始める。

3. 4〜6節

1Co 9:4 私たちには食べたり飲んだりする権利がないのですか。

1Co 9:5 私たちには、ほかの使徒たち、主の兄弟たちや、ケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。

1Co 9:6 あるいは、私とバルナバだけには、生活のために働かなくてもよいという権利がないのですか。

(1) パウロが持っている権利

①食べたり飲んだりする権利

②信者である妻を連れ歩く権利

③生活のために働かなくてもよいという権利

(2) この権利に関して、パウロは 6 つの論証を提示する。

①習慣に基づく論証

②モーセの律法に基づく論証

③霊的奉仕の優位性に基づく論証

④ほかの奉仕者の例に基づく論証

⑤祭司の特権に基づく論証

⑥主イエスの教えに基づく論証

4. 7 節

(1) 習慣に基づく論証

1Co 9:7 はたして、自分の費用で兵役に服す人がいるでしょうか。自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない人がいるでしょうか。羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない人がいるでしょうか。

①自分の費用で兵役に服す人がいるでしょうか（兵士）。

②自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない人がいるでしょうか（農夫）。

③羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない人がいるでしょうか（羊飼い）。

5. 8～10 節

(2) モーセの律法に基づく論証

1Co 9:8 私がこのようなことを言うのは、人間の考えによるのでしょうか。律法も同じことを言ってはいないでしょうか。

1Co 9:9 モーセの律法には「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない」と書いてあります。はたして神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。

1Co 9:10 私たちのために言っておられるのではありませんか。そうです。私たちのために書かれているのです。なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは、当然だからです。

①「**脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない**」（申 25：4）

②神は牛を気にかけておられるが、この命令が書かれたのは人間のためである。

6. 11 節

(3) 霊的奉仕の優位性に基づく論証

1Co 9:11 私たちがあなたがたに御霊のものを蒔いたのなら、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは、行き過ぎでしょうか。

①霊的なことがらは、物質的なことがらよりも、すぐれている。

②前者は永遠に続くが、後者は一時的である。

③霊的な奉仕を行ったパウロが、物質的な刈り取りを求めるのは当然である。

④「行き過ぎでしょうか」ということばに、パウロの憤りが表現されている。

7. 12 節

(4) ほかの奉仕者の例に基づく論証

1Co 9:12 ほかの人々があなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちは、なおさらそうではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。むしろ、キリストの福音に対し何の妨げにもならないように、すべてのことを耐え忍んでいます。

①ほかの人々は、コリント教会から援助を受けている。

②この教会の設立者であるパウロが援助を受けるのは、当然ではないか。

③しかしパウロは、福音宣教の妨げとならないように、その権利を放棄した。

8. 13 節

(5) 祭司の特権に基づく論証

1Co 9:13 あなたがたは、宮に奉仕している者が宮から下がる物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇のささげ物にあずかることを知らないのですか。

①神殿で仕える祭司は、神へのささげ物の中から自分の取り分を得る。

②異教の宮でも、同じ習慣があった。

9. 14 節

(6) 主イエスの教えに基づく論証

1Co 9:14 同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。

①マタ 10：10

Mat 10:10 袋も二枚目の下着も履き物も杖も持たずに、旅に出なさい。働く者が食べ物を得るのは当然だからです。

Ⅱ．権利の制限（15～18 節）

1. 15 節

1Co 9:15 しかし、私はこれらの権利を一つも用いませんでした。また、私は権利を用いたくて、このように書いているのでもありません。それを用いるよりは死んだほうがましです。私の誇りを空しいものにすることは、だれにもできません。

(1) パウロは、これらの権利を一つも用いないとことが権利だという。

①それがパウロの誇りである。

2. 16～17 節

1Co 9:16 私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えないなら、私はわざわいです。

1Co 9:17 私が自発的にそれをしているなら、報いがあります。自発的にするのでないとしても、それは私に務めとして委ねられているのです。

(1) パウロは、福音を宣べ伝えてもそれを誇ることはできないという。

①福音伝達は、神から与えられた使命である。

②もし福音を宣べ伝えないなら、最も哀れな人間になる。

③自発的に福音を宣べ伝えるなら、報いがある。

④自発的でないにして、神から委ねられて使命なので、福音を宣べ伝える。

3. 18 節

1Co 9:18 では、私にどんな報いがあるのでしょう。それは、福音を宣べ伝えるときに無報酬で福音を提供し、福音宣教によって得る自分の権利を用いない、ということです。

(1) パウロが得る報いとは何か。

①無報酬で福音を宣べ伝えるということ。

②使徒としての権利を用いないということ。

③これは、パウロの使徒職を否定する人たちへの反論である。

④パウロは、隣人の祝福のために自らの権利を放棄する。

＊偶像の宮での飲食を控える。

＊使徒としての権利の行使を控える。

Ⅲ. 使徒としての自由（19～23 節）

1. 19 節

1Co 9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。

(1) パウロは、誰の世話にもなっていないので、制約を受けることがなかった。

①その結果、すべての人の奴隷となることができた。

②それは、より多くの人を救いに導くためであった。

2. 20～22 節

1Co 9:20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには――私自身は律法の下にはいませんが――律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。

1Co 9:21 律法を持たない人たちには――私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリスト

の律法を守る者ですが――律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。

1Co 9:22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。

(1) ユダヤ人にはユダヤ人のようになった。

①律法を行うのは、救われるためではなく、ユダヤ人に伝道するためである。

②テモテに割礼を受けさせた（使 16：3）。

(2) 異邦人には異邦人のようになった。

①異邦人には、モーセの律法を持たない者のようになった。

②異邦人といるときは、異邦人が食べる物を食べた。

③パウロ（新約時代のユダヤ人信者）は、モーセの律法から解放された。

④彼らには、キリストの律法が与えられている。

＊キリストの教えと使徒たちの教え

＊モーセの律法とキリストの律法は一部重複するが、同じものではない。

(3) 弱い人たちには、弱い者になった。

①弱い人たちとは、良心が過敏な不信者のことである。

②パウロは、弱い人たちの心に寄り添った。

3. 23 節

1Co 9:23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。

(1) 福音を伝えるために、あらゆることをしている（パウロは一貫している）。

①他の人たちと福音の恵みを共有するのは、素晴らしいことである。

Ⅳ. 奨励（24～27 節）

1. 24 節

1Co 9:24 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。

(1) オリンピックゲームズに続いて有名なのは、イスティアゲームズである。

①コリント近くのイストミア地峡で開催された。

＊前 6 世紀頃に始まり、2 年に 1 回のペースで開催された。

＊陸上競技、レスリング、ボクシング、格闘技、馬車レース

（2）運動競技とクリスチャン生活の違い

①運動競技では、優勝者は一人だけである。

②クリスチャン生活は、他のクリスチャンとの競争ではない。

＊主に忠実な者には、賞が与えられる。

③2 テモ 4：8

2Ti 4:8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

2. 25 節

1Co 9:25 競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

（1）イスティアゲームズに参加する選手は、10 か月間の訓練を行った。

①彼らは、朽ちる冠を受けるために、自由を犠牲にした。

②霊的競技に参加する選手は、朽ちない冠を受けるために自由を犠牲にする。

3. 26～27 節

1Co 9:26 ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。

1Co 9:27 むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。

（1）パウロは、目標を定めて奉仕をしている。

①目標とは、罪人の救い、教会の成長、神の国の拡大などである。

②そのために、自己管理を徹底的に行っている。

＊からだは戦うべき敵である。

＊道徳的・倫理的戦いもある。

③パウロは、失格者になることを恐れている。

＊救いを失うことではなく、報奨を失うことである。

結論：5 つの冠

1. **朽ちない冠（1 コリ 9：24～25）**
2. **誇りの冠（1 テサ 2：19）**
3. **義の冠（2 テモ 4：7～8）**
4. **いのちの冠（ヤコ 1：12）**
5. **栄光の冠（1 ペテ 5：2～4）**

コリント人への手紙第一　17 回
偶像に献げられた肉（3）
―偶像礼拝の罪―
10：1～22

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
         ＊愛は知識に勝る（8：1～13）
         ＊使徒職の弁明（9：1～27）
         ＊偶像礼拝の罪（10：1～22）
         ＊市場で売っている肉（10：23～11：1）

2. 注目すべき点
   (1) この箇所では、「偶像に献げられた肉」というテーマが続いている。
   (2) パウロは、自分は強いと思っている信者に警告を発する。
      ①神は唯一であり、偶像の神々は存在しない。
      ②異教徒の隣人から誘われて、偶像の宮で食事をしても問題ではない。
      ③しかし、それは偶像礼拝につながる危険性がある。
      ④パウロは、イスラエルの民の荒野での経験を取り上げる。
         ＊出エジプト記 13～17 章、民数記 10～15 章

3. アウトライン（偶像礼拝の罪）
   (1) 荒野での悲劇的経験（1～5 節）
   (2) 悲劇的経験からの教訓（6～13 節）
   (3) 真の礼拝と偶像礼拝の対比（14～22 節）

4. 結論：1 コリ 10：13

偶像礼拝の罪について学ぶ。

2024 年 3 月 17 日（日）　1 コリ 10：1～22　偶像に献げられた肉（3）

Ⅰ．荒野での悲劇的経験（1～5 節）

1. 1～4 節

1Co 10:1 兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通って行きました。

1Co 10:2 そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、

1Co 10:3 みな、同じ霊的な食べ物を食べ、

1Co 10:4 みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。

(1) イスラエルの民が行った偶像礼拝は、悲劇的な結果をもたらした。

①イスラエルの民の経験とコリント教会の現状には、類似性がある。

(2) イスラエルの民には、5 つの特権が与えられていた。

①**「私たちの先祖はみな雲の下にいて」**

＊シャカイナグローリーによる超自然的な導きが与えられた。

②**「みな海を通って行きました」**

＊紅海を渡り、エジプトからの奇跡的な脱出を経験した。

③**「モーセにつくバプテスマを受け」**

＊神によって立てられた超自然的リーダーであるモーセと一体化した。

④**「みな、同じ霊的な食べ物を食べ」**

＊全員が、マナを食べた。それは、超自然的な食べ物で霊的な意味がある。

⑤**「みな、同じ霊的な飲み物を飲みました」**

＊全員が、岩から出た水を飲んだ。それは、超自然的な水であった。

＊その岩とは、キリストである。

(3) クリスチャンにも種々の特権が与えられている。

①過去において、神はイスラエルの民を支えられた。

②今も神は、クリスチャンを支えておられる。

2. 5 節

1Co 10:5 しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。

(1) 神はイスラエルの民を愛されたが、彼らの信仰を喜ばれなかった。

①エジプトを出たときに 20 歳以上であった者たちは、大部分が荒野で死んだ。

②例外は、カレブとヨシュアだけであった。

③モーセでさえも、約束の地に入ることができなかった。

Ⅱ．悲劇的経験からの教訓（6～13 節）

1. 6 節

1Co 10:6 これらのことは、私たちを戒める実例として起こったのです。彼らが貪ったように、私たちが悪を貪ることのないようにするためです。

(1)「**実例**」はギリシア語で「タイポス」（型）である。

①イスラエルの民の経験は、後の時代の信者たちに起こることの「型」である。

②洗礼も、霊的な食物や水も、民を罪の裁きから守ることはできなかった。

③同様に、洗礼も、聖餐式も、信者を罪の裁きから守ることはできない。

④それゆえ、コリントの信者たちは、貪りの罪に注意すべきである。

⑤次にパウロは、イスラエルの民の 4 つの失敗を列挙する（7～10 節）。

2. 7～8 節

1Co 10:7 あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように、偶像礼拝者になってはいけません。聖書には「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」と書いてあります。

1Co 10:8 また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、淫らなことを行うことのないようにしましょう。彼らはそれをして一日に二万三千人が倒れて死にました。

(1) 1 番目の失敗は、金の子牛事件である（出 32：6）。

①「立っては戯れた」とは、性的行為を指している可能性がある。

②偶像の宮での食事に参加する信者は、これと同じ罪を犯す危険性がある。

(2) 2 番目の失敗は、バアル・ペオルの礼拝である（民 25：1～5）。

①イスラエルの民は、偶像礼拝に参加し、モアブの娘たちと淫行を行った。

②その罪のゆえに、1 日に 2 万 3 千人が死んだ。

③コリント教会の中には、異教徒に誘われて、淫行を行う者たちがいた。

3. 9～10 節

1Co 10:9 また私たちは、彼らのうちのある人たちがしたように、キリストを試みることのないようにしましょう。彼らは蛇によって滅んでいきました。

1Co 10:10 また、彼らのうちのある人たちがしたように、不平を言ってはいけません。彼らは滅ぼす者によって滅ぼされました。

(1) 3 番目の失敗は、キリストの忍耐を試したことである（民 21：4～9）。

①彼らは、キリストから与えられたマナと水について不平を口にした。

②その結果、燃える蛇にかまれた。

③コリントの信者たちも、パウロの教えに反発し、キリストを試みている。

(2) 4 番目の失敗は、コラ、ダタン、アビラムの反抗である（民 16：14～47）。

①彼らは、モーセに挑戦した。

②彼らは、「**滅ぼす者**」（天使）によって滅ぼされた。

③コリントの信者たちも、パウロの権威に挑戦している。

6. 11～12 節

1Co 10:11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。

1Co 10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

(1) 今は、旧約時代の預言者たちが預言していたことが成就する時代である。

①今の時代の信者は、旧約時代の教訓を軽く扱うべきではない。

(2) このセクションのまとめ

①自分の信仰に自信のある者（偶像の宮で食事をする者）は、注意すべきである。

②イスラエルの歴史では、自信のある者が倒れることが頻繁に起こった。

7. 13 節

1Co 10:13 あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。

(1) 信者には希望がある。

①「試練」はギリシア語で「ペイラスモス」である。

＊この用語は、誘惑、試み、試練などの訳が可能である。

②この文脈では、コリントの信者が経験している誘惑である。

＊偶像礼拝、不道徳、キリストを試みること、不平不満など。

③このような誘惑は、誰もが経験するものである。

(2) ここでのパウロの教えは、あらゆる誘惑と試練に適用されるものである。

①神は真実な方である。

②神は、信者を耐えられない誘惑にあわせることはしない。

③誘惑とともに脱出の道も備えてくださる。

④「**脱出の道**」（the が付いている）は、誘惑の内容に応じて種々ある。

⑤自らを誘惑に晒すなら、脱出の道は閉ざされる。

Ⅲ. 真の礼拝と偶像礼拝の対比（14～22 節）

1. 14～15 節

1Co 10:14 ですから、私の愛する者たちよ、偶像礼拝を避けなさい。

1Co 10:15 私は賢い人たちに話すように話します。私の言うことを判断してください。

(1) 信者が偶像の宮での食事に参加するのは、危険なことである。

①「**私の愛する者たちよ**」という呼びかけは、命令の厳しさを和らげている。

②クリスチャンには、聖餐式と聖徒の交わりが用意されている。

(2) パウロは、次に語ることの準備をしている。

①パウロは、コリントの信者たちが判断力を持っていると確信している。

2. 16～17 節

1Co 10:16 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。

1Co 10:17 パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。

(1) ここでパウロは、聖餐式の恵みに言及する。

①聖餐式に関しては、通常はパンとぶどう酒という順番で出てくる。

②パウロは、その順番を逆にしている。

③パンにあずかることを強調するためだと思われる。

(2)「**賛美の杯**」

①この杯を飲むとき、キリストの血の犠牲のゆえに、神をほめたたえる。

②その杯から飲む人は、キリストの血がもたらす祝福にあずかっている。

(3)「**私たちが裂くパン**」

①キリストのからだと一体化するパンである。

②同じパンから食べると、信者は一つのからだとなる。

3. 18 節

1Co 10:18 肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。ささげ物を食する者は、祭壇の交わりにあずかることになるのではありませんか。

(1) ユダヤ教におけるささげ物からの教訓

①ささげ物を食する者は、神との交わり、人との交わりにあずかることになる。

②聖餐式に参加する者も、神との交わり、人との交わりにあずかる。

③偶像の宮での食事に参加する者も、悪霊との交わり、人との交わりにあずかる。

④パウロは、偶像には実体がないと語っていたが、その点について説明する。

6. 19～20 節

1Co 10:19 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。
1Co 10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

(1) パウロは、自らの論点を明確にする。

①偶像は実体のないものである。
②しかし、偶像礼拝の背後には悪霊がいる。
③偶像に献げる物は、悪霊に献げられている。
④その肉を食べるなら、悪霊と交わる者となってしまう。
⑤そうなってほしくはない。

7. 21～22 節

1Co 10:21 あなたがたは、主の杯を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。主の食卓にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。
1Co 10:22 それとも、私たちは主のねたみを引き起こすつもりなのですか。私たちは主よりも強い者なのですか。

(1)「**賢い人たち**」(15 節) なら理解できるはずだ。

①聖餐式にあずかることは、キリストと交わることである。
②偶像の宮での食事にあずかることは、悪霊と交わることである。
③両者は矛盾しあっているので、両立しない。
④矛盾した行為を続ける者は、主のねたみを引き起こす者である。
⑤弱い人間が、強い主に挑戦するのは、愚かなことである。

結論：1 コリ 10：13
1Co 10:13 あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。

1. 誘惑を経験しない人はいない。

(1) 金の子牛事件（出 32：6）。

①偶像礼拝への誘惑

(2) バアル・ペオルの礼拝（民 25：1～5）。

①偶像礼拝と淫乱への誘惑

(3) キリストの忍耐を試したこと（民 21：4～9）。

①マナと水に対する不満

(4) コラ、ダタン、アビラムの反抗（民 16：14～47）。

①モーセの権威に対する敵対

2. 耐えられないような誘惑はない。

(1) ヨブ 2：6

Job 2:6 【主】はサタンに言われた。「では、彼をおまえの手に任せる。ただ、彼のいのちには触れるな。」

(2) 詩 103：14

Psa 103:14 主は　私たちの成り立ちを知り／私たちが土のちりにすぎないことを／心に留めてくださる。

(3) 2 コリ 4：8

2Co 4:8 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。

3. 誘惑とともに脱出の道も備えられている。

(1) 大祭司であるイエスに近づけ。

(2) 祈り合える信仰の友を求めよ。

(3) 誘惑に勝った人たちのことを思い出せ。

(4) 誘惑の原因になっている人や状況から離れよ。

コリント人への手紙第一　18 回
偶像に献げられた肉（4）
―市場で売っている肉―
10：23～11：1

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
         ＊愛は知識に勝る（8：1～13）
         ＊使徒職の弁明（9：1～27）
         ＊偶像礼拝の罪（10：1～22）
         ＊市場で売っている肉（10：23～11：1）

2. 注目すべき点
   (1) この箇所でも、「偶像に献げられた肉」というテーマが続いている。
   (2) パウロとコリントの信者の相違点
      ①パウロ：偶像の宮での食事は、偶像礼拝である（絶対的命令）。
      ②コリントの信者たち：偶像の宮での食事は、アディアフォラである。
         ＊アディアフォラとは、善でも悪でもないこと（グレーゾーン）。
      ③パウロ：市場で売っている肉は、アディアフォラである。
         ＊重要なのは、愛に基づく自由の制限である。
      ④コリントの信者たち：市場で売っている肉は、アディアフォラである。
         ＊関心事は、知識に基づく権利の行使である。

3. アウトライン（市場で売っている肉）
   (1) 自由の原則（23～24 節）
   (2) 愛に基づく自由の制限（25～31 節）
   (3) 真理の適用（3 2 ～11：1 節）

4. 結論

（1）8〜10 章の復習
（2）1 コリ 10：32 の意味

市場で売っている肉について学ぶ。

Ⅰ．自由の原則（23〜24 節）

1. 23 節

1Co 10:23 「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。「すべてのことが許されている」と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。

（1）話題は、偶像の宮での食事から、日常生活における自由の問題に移行する。
①これは、絶対的命令からアディアフォラへの移行である。

（2）パウロにとっては、すべてのことが許されている。
①「すべて」とは、アディアフォラに関して言えることである。
②しかし、すべてのことが益になるわけではない。
③「益」の内容は、「人を育てる」ということである。
④信者の信仰成長に役立たないことは、すべきではない。

2. 24 節

1Co 10:24 だれでも、自分の利益を求めず、ほかの人の利益を求めなさい。

（1）優先順位を考えて行動すべきである。
①まず隣人の利益
②次に自分の利益

（2）他の書簡でのパウロの教え
①ロマ 15：1〜2

Rom 15:1 私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではありません。
Rom 15:2 私たちは一人ひとり、霊的な成長のため、益となることを図って隣人を喜ばせるべきです。

②ピリ 2：4

Php 2:4 それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。

（3）コリントの信者たちとパウロの相違点
①コリントの信者たち：自由を自分の利益を追求するための機会と捉えた。

②パウロ：自由を隣人の徳を建てるための機会と捉えた。

Ⅱ．愛に基づく自由の制限（25～31 節）

1. 25～26 節

1Co 10:25 市場で売っている肉はどれでも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。

1Co 10:26 地とそこに満ちているものは、主のものだからです。

(1) 市場で売っている肉は、どれでも食べてよい。

①その肉は、偶像に献げたものかどうかを問わなくてもよい。

②偶像に献げた肉かどうかは、アディアフォラ（善でも悪でもない）である。

(2) パウロは、ユダヤ人が食前の祈りでよく唱える聖句を引用する。

①詩 24：1（ダビデによる。賛歌）

Psa 24:1 地とそこに満ちているもの／世界とその中に住んでいるもの／それは【主】のもの。

②食物になるものは、【主】が恵みによって用意されたものである。

③人間は、感謝してそれをいただけばよい。

2. 27 節

1Co 10:27 あなたがたが、信仰のないだれかに招待されて、そこに行きたいと思うときには、自分の前に出される物はどれも、良心の問題を問うことをせずに食べなさい。

(1) 不信者の家に招待された場合は、どうするか。

①そこに行きたいと思うなら、行ってもよい。

②自分の前に出される物はどれも、食べてもよい。

③その肉がどこから来たかは、問わなくてもよい。

3. 28 節

1Co 10:28 しかし、だれかがあなたがたに「これは偶像に献げた肉です」と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。

(1) 他の信者がいて、「これは偶像に献げた肉です」と言った場合は、どうするか。

①そう知らせてくれた人のために、食べるべきではない。

②彼は、良心の弱い（キリスト者の自由を十分に理解していない）人である。

③彼は、偶像に献げた肉を食べるのは罪だと思っている。

④彼の良心に敬意を示すために、その肉を食べてはいけない。

4. 29～30 節

1Co 10:29　良心と言っているのは、あなた自身の良心ではなく、知らせてくれた人の良心です。私の自由が、どうしてほかの人の良心によってさばかれるでしょうか。
1Co 10:30 もし私が感謝して食べるなら、どうして私が感謝する物のために悪く言われるのでしょうか。

(1) 2 つの修辞的疑問文は、難解である。

①リビングバイブル

1Co 10:29 この場合、肉についての自分の判断よりも、相手の考えが大切なのです。「なぜ他人の考えに支配されたり、束縛されたりしなければならないのですか。
1Co 10:30 神に感謝してそれを食べることができれば、他人からとやかく言われることはないではありませんか」と言うかもしれません。

②文語訳

1Co 10:29 良心とは汝の良心にあらず、かの人の良心を言ふなり。何(なに)ぞわが自由を他(ほか)の人の良心によりて審かるる事をせん。
1Co 10:30 もし感謝して食する事をせば、何(なに)ぞわが感謝する所のものに就きて譏(そし)らるる事をせん。

(2) パウロの意図

①自分は、自由を行使しても、他の人から裁かれる筋合いはない。
②自分が自由を主張しない理由は、隣人の利益のためである。

5. 31 節

1Co 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

(1) 信者が自分の行為を判定する基準は、神への愛と隣人への愛である。

①信者は、神の栄光を現すために生きている。

Ⅲ. 真理の適用（32～11：1 節）

1. 32 節

1Co 10:32 ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。

(1) 自由を制限する理由は、隣人につまずきを与えないためである。

①ユダヤ人、ギリシア人、神の教会
②つまずきを与えるとは、信仰の成長を阻むことである。

2. 33 節

1Co 10:33 私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。

(1) パウロは、人を喜ばせようとしている人ではない。

①アディアフォラの問題が自分と相手の間の壁とならないようにしている。

②パウロの願いは、隣人の利益である。

＊不信者の救い

＊信者の霊的成長

3. 11：1

1Co 11:1 私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。

(1) パウロの勧告

①パウロは、キリストに倣う者である。

＊キリストは、愛のゆえに神としての特権を捨てた。

②コリントの信者は、パウロに倣うべきである。

＊コリントの信者も、愛のゆえに権利を捨てるべきである。

結論

1. 8～10 章の復習

(1) パウロは、異教の宮での食事に参加することを禁じた（絶対的命令）。

①これは偶像礼拝への参加である。

(2) パウロは、日常生活において市場で売っている肉を食べることを許可した。

①これはアディアフォラであり、信者の自由に委ねられた問題である。

(3) 隣人の利益のために自由を制限すべき場合がある。

①その隣人の良心は、弱い。

(4) 信者は、神の栄光を現すために生きている。

2. 1 コリ 10：32 の意味

1Co 10:32 ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。

(1) この節では、人類が 3 つに区分されている。

①ユダヤ人、②異邦人、③神の教会

(2) ユダヤ人と神の教会が区別されている。

①イスラエルと教会の区別は、ディスペンセーショナリズムの重要な特徴。

②この区別は、置換神学の誤りを証明している。

コリント人への手紙第一　19 回
女のかぶり物
11：2～16

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
      ③女のかぶり物（11：2～16）

2. 注目すべき点
   (1)「〇〇についてですが」（ペリ・デ）ということばは出ていない。
      ①「隣人の祝福のために自分を犠牲にする」という大きな流れは続いている。
   (2) パウロは、「女のかぶり物」と「聖餐式」のテーマを取り上げる。
      ①「かぶり物」の部分は、称賛のことばをもって始まる。
      ②「聖餐式」の部分は、叱責のことばをもって始まる。
   (3) 講解説教を語ることの祝福
      ①難解な箇所でも取り組まないわけにはいかない。
      ②過去の反省も込めて、しっかりと釈義をしたい。

3. アウトライン
   (1) 創造の秩序（2～9 節）
   (2) 天使たち（10～12 節）
   (3) 自然の摂理（13～15 節）
   (4) 教会の習慣（16 節）

4. 結論
   (1) 礼拝の目標
   (2) 聖書的性理解

礼拝でのかぶり物から教訓を学ぶ。

2024年3月31日（日）　1コリ11：2〜16　女のかぶり物

Ⅰ．創造の秩序（2〜9節）

Ⅰ．2節

1Co 11:2 さて、私はあなたがたをほめたいと思います。あなたがたは、すべての点で私を覚え、私があなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを堅く守っているからです。

(1) パウロは、称賛のことばをもって、この箇所を始めている。

①彼らは、パウロを覚え、パウロの教えを堅く守っている。

②「伝えられた教え」とは、「使徒たちの教え」である。

＊その中には、礼拝でのかぶり物に関する教えも含まれていた。

③新約聖書はまだ完成していなかったが、信者たちは、基本教理は守っていた。

2. 3節

1Co 11:3 しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。

(1) しかしパウロは、かぶり物について、さらに詳しく教える必要性を覚えた。

①コリント教会は、異教文化の中から救われた人たちが集う若い教会であった。

②ユダヤ人、ギリシア人、ローマ人、その他の人たちがいた。

③信者たちは、それぞれの過去の体験や習慣を教会生活に持ち込んで来た。

(2) パウロは、まず特別啓示を基に教える。

①創造の秩序を基にした教えは、時間と空間を超越した普遍的教えである。

＊この教えは、男女に等しく適用される。

＊21世紀のクリスチャンにも適用される。

③パウロは、安定的に継続する社会には2つの大きな柱が存在すると教える。

＊「かしら」（権威）と「かしらに従う者」（従順）である。

(3) 創造の秩序の例が、3つ挙げられる。

①男のかしらはキリストである。

＊「かしら」は、ギリシア語で「ケファレイ」である。

＊それゆえ、男はキリストの権威に服従する。

②女のかしらは男である。

＊女が男の権威に服従するのは、創造の秩序の中で決められたことである。

＊この場合は、夫婦関係、親子関係などの男女関係である。

＊男と女の役割の違いはあるが、これは優劣の差ではない。

③キリストのかしらは神である。

＊三位一体の中にも権威と従順の関係が存在する。

＊キリストと神の間には、上下関係はない。
＊男と女の間にも、上下関係はない。

3. 4 節

1Co 11:4 男はだれでも祈りや預言をするとき、頭をおおっていたら、自分の頭を辱めることになります。

(1) まず、男に対する教えが語られる。
①正統派のユダヤ人は、礼拝のときだけでなく、常時かぶり物をしている。
②パウロは、ユダヤ的習慣以外の根拠を持ち出している。
③預言をするとは、預言の賜物を行使することである。
＊新約聖書が未完だったので、預言の賜物が行使された。
④ローマ人は偶像礼拝の際に、トーガ（一枚布の上着）で頭をおおった。
＊大祭司としてのローマ皇帝（アウグストゥス）の像
＊頭をおおう男が教会にいたのは、異教の悪影響が及んでいたということ。

(2) 4 節の解説
①「頭」は、ギリシア語で「ケファレイ」である。
＊先ほどの「かしら」と同じ単語である。
②ここでは、「ケファレイ」という単語が、２種類の意味で使われている。
＊文字どおりの意味と比ゆ的意味（ことば遊び）
③男が「頭」をおおっていたら、「かしら」を辱めることになるということ。
＊かしらであるキリストを隠していることになる。

4. 5～6 節

1Co 11:5 しかし、女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります。それは頭を剃っているのと全く同じことなのです。
1Co 11:6 女は、かぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭を剃ることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。

(1) 次に、女に対する教えが語られる。
①コリントの神殿娼婦たちは、頭にかぶり物を着けていなかった。
②女のかぶり物は、自分を守るための手段でもあった。
③しかし教会には、自由の行使と称して、かぶり物を着けない女たちがいた。
④女が男に教えることは禁じられた（2 テモ 2：12）が、祈りと預言は許された。

(2) 5 節の解説

①ここでも、「ケファレイ」という単語が、２種類の意味で使われている。
＊文字どおりの意味と比ゆ的意味（ことば遊び）
②頭にかぶり物を着けない女が辱めているのは、「自分のかしら」（夫）である。
＊妻としての立場を越えて行動している。
③かぶり物を着けないなら、髪も切ってしまいなさい。
④それが恥ずかしいことなら、かぶり物を着けるべきである。

5. 7～9 節

1Co 11:7 男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので、頭にかぶり物を着けるべきではありません。一方、女は男の栄光の現れです。
1Co 11:8 男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。
1Co 11:9 また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。

(1) 男は神のかたちであり、神の栄光の現れである（創 1：26～27）。
①男が頭にかぶり物を着けると、神の栄光を隠すことになる。

(2) 女は男の栄光の現れです。
①女は、男の助け手として創造された。
②男は、男としての使命を果たすための助け手を得た。
③そういう意味で、女は男の栄光の現れである。
④女は、男の権威への服従のしるしとして、かぶり物を着けるべきである。

II．天使たち（10～12 節）

1. 10 節

1Co 11:10 それゆえ、女は御使いたちのため、頭に権威のしるしをかぶるべきです。

(1) 天使たちは、教会の礼拝に興味を抱き、それを観察している。
①1 コリ 4：9

1Co 4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。

②1 テモ 5：21

1Ti 5:21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます。これらのことを先入観なしに守り、何事もえこひいきせずに行いなさい。

(2) 天使たちは、女が神の教えに従うかどうかを観察している。
①頭にかぶり物を着けないのは、夫の権威に対する反抗である。

②頭にかぶり物を着けないのは、キリストに仕える夫を目立たせる行為である。
③頭にかぶり物を着けないのは、神の命令を軽く扱うことである。

2. 11～12 節

1Co 11:11 とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。
1Co 11:12 女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から出ています。

(1) これは誤解への警告のことばである。
①男と女は、相互に依存する関係にある。
②互いに相手に対して優越意識を持ってはならない。
③男と女は、互いに補完し合うことによって、神の栄光を表す。

Ⅲ. 自然の摂理（13～15 節）

1. 13 節

1Co 11:13 あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。

(1) パウロは、一般啓示に基づいて、自分自身で判断せよと教える。
①パウロが取り上げるテーマは、髪の長さである。
②女は、摂理的に長い髪（かぶり物）を与えられている。
③教会の集会でも、その延長として、物理的かぶり物を着けるべきである。

2. 14～15 節

1Co 11:14 自然そのものが、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは彼にとって恥ずかしいことであり、
1Co 11:15 女が長い髪をしていたら、それは彼女にとっては栄誉なのです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。

(1) 自然の摂理が教えている。
①男の髪は、相対的に女の髪よりも短い。
②女の髪は、相対的に男の髪よりも長い。
③それは彼女にとっては栄誉である。
＊女性であることと、従順であることのしるしとなる。
④髪は、かぶり物として女に与えられている。

Ⅳ. 教会の習慣（16 節）

1. 16 節

1Co 11:16 たとえ、だれかがこのことに異議を唱えたくても、そのような習慣は私たちにはなく、神の諸教会にもありません。

(1) パウロの教えは、目新しいものではない。

①神の諸教会がすでに実践してきたことである。

②信者の自由を盾に、教会の集会に混乱をもたらすことは許されない。

③偶像に献げた肉と同じように、個人の自由よりも隣人の祝福が優先される。

④権威に従わない女の存在は、神の教えに対する侮辱である。

結論

1. 礼拝の目標

(1) 女の役割

①頭にかぶり物を着けることによって、かしらへの従順を表現する。

②これは、創造の秩序への従順である。

③頭にかぶり物を着けないことは、かしらへの挑戦である。

④男を目立たせることによって、キリストを目立たなくさせている。

(2) 男の役割

①頭にかぶり物を着けないことによって、かしらへの従順を表現する。

②頭にかぶり物を着けることは、キリストを隠すことである。

③自分が目立つことに興味がある人は、真の礼拝者にはなれない。

(3) 天使たちの役割

①礼拝への参加

②礼拝の観察

③神の栄光への関心

2. 聖書的性理解

(1) コリントにおけるディオニシウス礼拝

①ギリシア神話の神、ワイン、豊穣、狂乱の祭りを司る神。

②ゼウスとセメレ（ゼウスの愛人）の息子

＊正妻ヘラの怒りを避けるために、幼い頃から女装させられた。

③ディオニシウス祭は、神の狂乱を体験する祭りであった。

＊奴隷、自由民、貴族などすべての階層が、祝祭に参加した。

＊祭りの期間、神の前では全員が平等であるという考えが強調された。

＊服装倒錯が礼拝の一部となっていた。

④この悪影響が教会に及んでいる（かぶり物、聖餐式、聖霊の賜物の行使）。

(2) かぶり物のテーマは、聖書的性理解と深く係わっている。

①パウロは、神―キリスト－男―女という創造の秩序を強調した。

②これは、優劣の順序ではなく、役割の違いである。

③創造の秩序の中では、人間には男と女しか存在しない。

④ジェンダーレスの教育や社会を目指すことは、神の意図に反することである。

⑤LGBT をめぐる社会の動向は、家庭と教会を破壊する方向に動いている。

(3) 性の聖書的理解ネットワーク「NBUS」

①ナッシュビル宣言（全 14 条）の第 1 条

私たちは、神が作った結婚は、性的で、出産を伴い、生涯にわたる契約関係であり、一人の男と一人の女が夫と妻として一つになるものであること、またキリストとその花嫁である教会の間で結ばれた契約に基づく愛を象徴していることに同意する。

私たちは、神が結婚を同性愛、一夫多妻、多夫多妻の関係となるように計画されたという考えを否定する。また、結婚が神の前で結ばれる契約ではなく、単なる人間の契約であるという考えも否定する。

(4) かぶり物を着ける女性は、人間の目には奇異に見えるが、神には喜ばれている。

≪　補足　≫

---

1 コリント 11：2～16　「女のかぶり物」に関する補足説明

コリント人への手紙第一 19 回目のメッセージ（3 月 31 日）のタイトルは、「**女のかぶり物**」（11：2～16）でした。配信後、適用に関する質問を何人かの方々からいただきました。確かに、メッセージの最後に語る適用の部分が情報不足でした。そこで、補足説明を以下のように追加しますので、ご覧ください。私の願いは、このテーマによって分裂や分派が起こらないようにということです。

1. 1 コリ 11：2～16 は、釈義よりも適用のほうが難しい。

(1) 真剣に釈義に取り組んだ。

(2) 適用に関しては、知恵が必要である。

2. 適用に関して、考慮すべき点がいくつかある。

(1) 1 コリ 11：2～16 全体の文脈は、神が創造した秩序への服従である。

①父なる神、キリスト、男、女

②これは上下関係ではなく、役割の違いに基づく秩序である。

(2) かぶり物は、妻が夫の権威に従っていることの象徴である。

①かぶり物とは、帽子ではなくベールである。

②コリントでは、娼婦は、かぶり物を着けないで公の場に出た。

(3) この箇所を基にかぶり物を着ける女性の信仰は、受容されるべきである。

①その女性は、神の命令を真剣に受け止めている方だと類推される。

②特に、既婚者の女性に関しては、そう言える。

(4) 内面の実質が伴っていないなら、外面を整えることには、なんの意味もない。

①神は、私たちの外面ではなく、内面を見て喜ばれる。

②妻の役割を果たしていない人がかぶり物を着けても、神は喜ばれない。

(5) かぶり物は、現代の私たちの文化の中では違和感を与える。

①カトリックの修道女やイスラム教徒の女性

②かぶり物を着けようとする女性は、周りの人への影響も考えるべきである。

(6) すべてのことを、愛の原則に基づいて判断する必要がある。

①主の栄光のために与えられている命令を、分派の原因としてはならない。

②愛の関係を確認しながら、互いの信仰を尊重すべきである。

＜参考＞

動画「Q391 女のかぶり物【3 分でわかる！聖書】〈番外編〉」

https://www.youtube.com/watch?v=ZPmUAiqs5Oo

コリント人への手紙第一　20 回
聖餐式
11：17～34

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
   (4) 教会からの質問（7～16）
      ①結婚に関する教え（7：1～40）
      ②偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
      ③女のかぶり物（11：2～16）
      ④聖餐式（11：17～34）

2. 注目すべき点
   (1)「かぶり物」の部分は、称賛のことばをもって始まる。
   (2)「聖餐式」の部分は、叱責のことばをもって始まる。
      ①このテーマは、コリント教会からの手紙にはなかったものである。
      ②パウロは、これに関する情報を「聞いた」（18 節）。
   (3) 古代世界では、食事と礼拝が一連のものとして行われていた。
      ①初期の教会でも、食事会の一部として聖餐式が行われていた。
      ②コリントでは、食事会は、愛ではなく利己心を示す場となっていた。

3. アウトライン
   (1) 貧しい人たちを辱める行為（17～22 節）
   (2) 主のからだを辱める行為（23～26 節）
   (3) 解決（1）―主のからだをわきまえる（27～32 節）
   (4) 解決（2）―互いに待ち合わせる（33～34 節）

4. 結論：聖餐式に与る準備

聖餐式の混乱から教訓を学ぶ。

Ⅰ．貧しい人たちを辱める行為（17～22 節）

1. 17 節

1Co 11:17 ところで、次のことを命じるにあたって、私はあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが益にならず、かえって害になっているからです。

(1) 最初に取り上げるのは、水平の関係（信者同士の関係）である。

①コリント教会の集会は、益になるよりも害になっている。

②そういう集会なら、開かないほうがましである。

2. 18～19 節

1Co 11:18 まず第一に、あなたがたが教会に集まる際、あなたがたの間に分裂があると聞いています。ある程度は、そういうこともあろうかと思います。

1Co 11:19 実際、あなたがたの間で本当の信者が明らかにされるためには、分派が生じるのもやむを得ません。

(1) 家の教会の一つは、ガイオの家にあった（ロマ 16：23)。

①この当時、コリントには複数の家の教会があったと思われる。

②それらの家の教会のすべてが、同じ間違いを犯していたと思われる。

③教会に集まる際に、分裂があった。

④この「分裂」は、どのリーダーに付くかではなく、社会的階層上の分裂である。

(2) パウロは、この情報を聞いて、それをかなりの程度信じた。

①分派には、積極的な側面もある。

②教理上の分派は、本当の信者と偽の信者を明らかにする。

③しかし、コリントの教会に生じている分派は、評価できるものではない。

3. 20～21 節

1Co 11:20 しかし、そういうわけで、あなたがたが一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにはなりません。

1Co 11:21 というのも、食事のとき、それぞれが我先にと自分の食事をするので、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だからです。

(1) 初期の教会での聖餐式は、教会活動の中心となっていた。

①現代の教会における聖餐式の位置づけとは大いに異なる。

②聖餐式の頻度も、毎日か毎週であった（使 2：42～46、20：7)。

③しかし、分派があるなら、真の聖餐式とはならない。

④偶像の宮での食事と聖餐式が両立しないのと同じことである。

(2) 聖餐式は、信者がともに食する「愛餐」（アガペー）の一部となっていた。

①しかし、裕福な者たちは、それぞれが我先にと自分の食事をしていた。

②貧しい者たちは、空腹なまま放置された。
③中には、過剰にぶどう酒を飲み、酔っている者もいた。
④コリント教会の愛餐は、信者の愛と一致を示す食事とは到底言えなかった。

4. 22 節

1Co 11:22 あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか。それとも、神の教会を軽んじて、貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせたいのですか。私はあなたがたにどう言うべきでしょうか。ほめるべきでしょうか。このことでは、ほめるわけにはいきません。

(1) パウロは、この書簡の中で最も厳しいことばを語っている。
①裕福な者は、自分の家で飲み食いすべきである。
②教会で自分勝手に飲み食いするのは、神の教会を軽んじることである。
③さらに、貧しい者たちを辱めることである。

(2) このことでは、ほめるわけにはいかない。
①教会に属する者たちは、キリストにあって一つである。
②自由人と奴隷、ギリシア人と野蛮人、ユダヤ人と異邦人、ローマ人と無法な者
③教会だけが、当時の社会で唯一、区別が存在しない集まりであった。
③教会の中に貧富の差による分裂があるなら、それは教会とは言えない。

Ⅱ．主のからだを辱める行為（23～26 節）

1. 23 節 a

1Co 11:23a 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。

(1) 次に取り上げるのは、垂直の関係（キリストと信者の関係）である。
①これは、水平の関係よりもさらに深刻な問題である。

(2) パウロが伝える教えは、主から受けたことである。
①このことばは、ユダヤ人が採用した真理の伝達法を示している。
②つまり、啓示の重要性を教えているということである。
③1 コリ 15：3a

1Co 15:3a 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。

④キリスト―使徒たち―パウロという啓示の流れがある。

2. 23b～24 節

1Co 11:23b すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、

1Co 11:24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

(1) 聖餐式が制定された状況

①タイミングは、イエスが弟子の一人に裏切られる夜であった。

②それにもかかわらず、イエスは弟子たちを愛された。

③聖餐式は、パン裂きとも呼ばれる。

(2)「わたしのからだです」

①化体説（カトリック教会）

②実体共存説（ルター派と聖公会）

③霊的存在説（改革派）

④記念説

＊パンはイエスのからだを示す象徴である。

＊パンを食する人は、イエスの死と同一化し、その死がもたらす祝福に与る。

＊「わたしを覚えて」とは、単なる記念ではない。

＊イエスの死がもたらした祝福が成就するように生きることである。

3. 25 節

1Co 11:25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

(1) ぶどう酒は、イエスの血潮の象徴である。

①血を流すことなしには、罪の赦しはない。

②ヘブ 9：22

Heb 9:22 律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。

③この血によって、神との新しい関係が設立された。

④それが、新しい契約である。

⑤「わたしを覚えて」とは、血潮がもたらした祝福が成就するように生きること。

4. 26 節

1Co 11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

(1) 聖餐式が宣言しているのは「十字架のことば」である。

①主は、罪人の罪を赦すために十字架にかかられた。

②主は、低くされた後、高く上げられた。

③主は、やがて地上に戻って来られる。

Ⅲ．解決（1）―主のからだをわきまえる（27～32 節）

1．27 節

1Co 11:27 したがって、もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。

（1）この聖句は、聖餐式の前の自己吟味の必要性を教えたものとされる。

①しかし、文脈上は「水平関係」を吟味することの必要性を教えたものであろう。

（2）信者の集合体である教会は、主のからだである。

①他の兄弟への愛の配慮がないままでパンとぶどう酒に与るのは、罪である。

②それは、主のからだと血に対する罪である。

2．28～29 節

1Co 11:28 だれでも、自分自身を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

1Co 11:29 みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。

（1）自分を吟味する。

①キリストは、和解と一致をもたらすために死んでくださった。

②もし傷つけた兄弟がいるなら、罪を告白し、和解すべきである。

③和解しないで聖餐式に参加する者は、自分の身にさばきを招くことになる。

3．30 節

1Co 11:30 あなたがたの中に弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいるのは、そのためです。

（1）さばきの内容

①病気と死

②彼らは自己吟味をしなかったので、主からの矯正的さばきが下った。

4．31～32 節

1Co 11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。

1Co 11:32 私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。

（1）さばきを免れる方法

①自分で自分をわきまえる（さばく）なら、さばかれることはない。

(2) 信者がさばきを受ける場合

①この世（不信者）が受けるさばきとは異なる。

②つまり、信者は救いを失うことはないということである。

③主による懲らしめは、罪の生活を矯正するためのものである。

④最も厳しい懲らしめは、地上のいのちが取り去られることである。

Ⅳ. 解決（2）―互いに待ち合わせる（33～34 節）

1. 33 節

1Co 11:33 ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。

(1) 愛餐会に集まるときは、他の兄弟たちに配慮すべきである。

①先に自分の食事を食べ始めてはならない。

②他の兄弟たちが揃うまで、待ちなさい。

③自分の食事を他の兄弟たちに分けることも示唆されている。

2. 34 節

1Co 11:34 空腹な人は家で食べなさい。あなたがたが集まることによって、さばきを受けないようにするためです。このほかのことについては、私が行ったときに決めることにします。

(1) 空腹の問題に対処できない人は、愛餐に与る前に、自分の家で食べればよい。

①そうすれば、さばきを免れることができる。

(2) 聖餐式に関する他の問題は、パウロが訪問したときに、決めることになる。

結論：聖餐式に与る準備

1. その意味を黙想する。

(1) イエスは、渡される夜、聖餐式を制定された。

(2) パンとぶどう酒は、イエスの十字架の死を象徴している。

2. キリストのみからだをわきまえる。

(1) みからだをわきまえるとは、他の兄弟たちへの愛と配慮を確認することである。

(2) 聖餐式は、和解と一致を表現する聖礼典である。

3. 自分の霊性を準備する。

(1) 傷つけた兄弟がいるなら、罪を告白し、和解する。

(2) 自分の内面を建徳的に吟味する。

(3) 自分を責めて、聖餐式から退いてはならない。